

## ベストクラス選定理由書

作成者：山田詩織、原上寛規、綿貫克洋、勝田太郎、小倉早織、小川公大、高橋優太、吉水裕也、藤原和政、藤井良憲

科目名称：特別支援教育リーダーのための創発的コミュニケーション (担当教員名：宇野 宏幸、岡村 章司、石橋 由紀子)	
課程：大学院(修士)	開講時期：前期
授業形態：講義・演習	授業規模：30人以下
インタビュー対象教員名：宇野 宏幸、岡村 章司、石橋 由紀子 (実施日時：令和4年8月16日(火)；実施場所：オンライン)	
インタビュー対象受講者名：生田 佳美、平岡 尚子 (実施日時：令和4年8月4日(木)；実施場所：教育・言語・社会棟306室)	
<p>選定理由</p> <p>本科目のテーマは、学校の教員間や保護者との間で必要とされるコミュニケーションのあり方について、デザイン思考の立場から考えるような授業となっている。具体的には、パワーポイントを用いたプレゼンテーション、ワークショップなどにおけるファシリテーション、担任などへのコンサルテーションを学ぶことができる。</p> <p>履修は、現職院生に限られており、現職向けの授業である。特別支援教育コーディネーターや特別支援教育の役割を担う立場の教員は、中堅層(ミドルリーダー)が多いことから、学校内や保護者との連絡調整・連携が求められるため、受講した現職院生にとって、有意義な授業であったことが授業アンケートから伺うことができ、ベストクラスに選定した。</p> <p><b>【授業者へのインタビューより】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○『ファシリテーション』: 研修会の仕掛けや工夫点、仕掛けの機能を分析し、場の設定次第で誰もがファシリテーションをできることを体験しながら学べるよう工夫されていた。学校現場に戻った際、ありきたりではなく、自分らしさ満載な研修企画や授業ができるようになってほしいとのことである。</li> <li>○『プレゼンテーション』: フレッシュなデザイン思考を活用したプレゼンテーションを模索する。相手の真のニーズを捉えられるように、論理的な面のみならず感性的な面を中心に組み立てよう工夫されていた。個人作業でプレゼンテーション資料を作成し、Stream でプレゼン動画を共有し合った。すんなり分かりやすい授業よりも、もやもや感からくるアイデアを大切にほしい、今後、よりよい特別支援教育になるよう見方を変えて教育活動を見直してほしいとのことである。</li> <li>○『コンサルテーション』: コンサルタントとコンサルティを中心に考えていくことを重視し、自らの経験をもとに考え、グループで共有できるよう工夫されていた。学校現場を意識し、協働して取り組む経験を積めるよう、講義時間よりもグループワークの時間を多くするようにしていた。学んだことを現場でどう活かせるか、学んだことで自身にどのような変化があったか見ていく必要があるとのことである。</li> </ul> <p><b>【受講生へのインタビューより】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院での学びで、学ぶ意味を知った。自分たちで学ぶってことが分かった。</li> <li>・個々がやり切った後に協働するのが大事である。一緒に取り組むことが協働ではないということが分かった。</li> <li>・自分の役割を考えることができた。できることを考えて臨み、みんなで同じ方向を向いて進むことの重要性がわかった。なんどでも受けた授業!</li> </ul> <p>本科目を川柳にまとめてみると…</p> <p style="text-align: center;">「苦しさを 伴いながら 新発見」 「全力で 行けばわかるさ 本当の学び」 「協働で 見方あり方 NEW スタイル」 「きょうどうと みんなで創発 時間外」 (協働/今日どう?)</p>	

以上から、大学院での学び直しや知識スキルのアップデートをし、今後も学び続ける教師となってほしいという教員の願いから、学校現場に寄り添った授業スタイルである。受講生も授業に対して常に高い課題意識をもって取り組んでいる様子が分かった。教員と学生による「創発」が行われる授業であり、ベストクラスとしてふさわしいと考える。